# ヨシでびわ湖を守る　リエデンプロジェクト

株式会社コクヨ工業滋賀

## はじめに

琵琶湖の水環境、生態系、景観保全や$CO_2$回収に重要な役目を果たしているヨシ原。

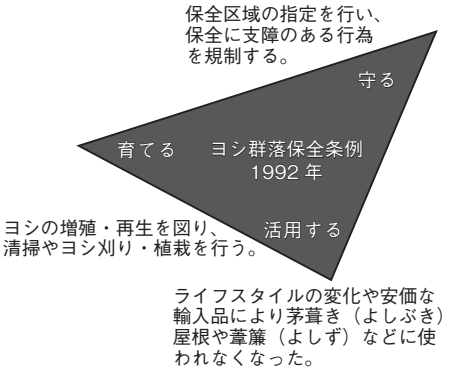
古くから琵琶湖周辺の人々は、「ヨシ葺き屋根」「すだれ」などの伝統産業と共に、ヨシ原と深く関わり合いながら独自の文化を形成してきました。しかし、人の手が適度に入ることで守られてきたヨシ原は、時代の変化の中で人との関わりが薄れてしまい、手入れ（刈り取り）が行き届かなくなってしまいました。かつて260haあったヨシ原は半減してしまい徐々に自然のバランスを崩す原因となっています。ヨシ原の荒廃は、水質問題だけでなく、湖岸の浸食を招き、豊かな水辺の景観を損ない、受け継がれてきた伝統的なヨシ文化を衰退させています。更に、ヨシ原を棲み家とする全ての生き物たちに影響を与えることとなり、滋賀県では1992年にヨシ群落保全条例を定め、「守る」「育てる」「活用する」の3本柱でヨシ原の保全を進めておられ、県内の多様な主体が連携し、それぞれの立場で関わっていくことが求められています。私達は、これらを実践することが豊かな琵琶湖を守り、近畿圏約1450万人の生活を支える水資源の保全に貢献できると考えています。

## リエデン（ReEDEN）プロジェクトとは

Reedが“ヨシ”EDENが“楽園”頭のReで“還る・帰る”を組み合わせ「ヨシで美しい琵琶湖に戻したい。」という思いを込めたブランド名です。

このプロジェクトは、琵琶湖の環境問題に貢献するため2007年、衰退するヨシ原の保全活動とヨシの活用を目的とする事業としてスタートし、昨年10周年を迎えています。2009年には、活動組織「ヨシでびわ湖を守る

冬の広大なヨシ原風景



伝統的なヨシ産業の衰退によりヨシ原は荒廃し、ヨシ文化の崩壊に

## ReEDENとは

**Re－　：還る・帰る**
**Reed　：ヨシ**
**EDEN　：エデン（楽園）**

ヨシ刈りボランティアのようす

ネットワーク」を設立し、冬のヨシ刈り、夏の外来魚駆除釣り大会やカヌーでヨシ原観察会を実施しており、地域社会と連携した琵琶湖に関わる活動を行っています。更に、ヨシの新たな活用を進めるエコ文具「リエデンシリーズ」は、使われなくなったヨシの持続可能な活用を進めており、「刈る」「作る」「使う」のヨシの活用サイクルを創り出し、環境と経済を両立させた取り組みを進めています。

### ヨシでびわ湖を守るネットワーク

ヨシ原の崩れた自然バランスを戻すには、冬の枯れたヨシを地道に刈り続けることが最も有効です。しかし、手作業が主体のヨシ刈り作業は多くの人手が必要になります。2007年から当社の社員だけで始めたヨシ刈り活動は、この問題に直面しました。そこで、広く地域に協力を求めることを思いつき、2009年に立ち上げたのが「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」なのです。

活動組織「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」は多様な事業体がつながる協働を実現したオリジナルな組織です。“社内活動から地域との協働活動”への転換です。2009年のネットワーク立ち上げと共に、年々その輪が広がりはじめ、近年の活動では多数の事業体から多くの方に参加いただいています。加えて行政、博物館、学校からも参加する規模となりヨシ刈り回数を増やすことで保全地域を広げています。

このネットワークは、一企業の活動に留まらない組織を作ることが目的です。県内事業所を歩き、琵琶湖をキーに「地域共通の環境課題に一緒に関わっていくこと」を訴え、ようやく数社の賛同を得て活動をスタートさせました。その後、賛同の輪が徐々に広がる中で第一に考えたのは長く継続することです。「活動は無理をせず」「楽しみながら地域に根ざす」ことを目指し、地元の皆さんとの親密化を図ることで形を変えたヨシ刈り文化を継承させています。また、常に新しい仲間を入れることで組織の活性化を図っており、現在、賛同の輪は125社にまで広がっています。

ヨシ刈りは1シーズン（12月～2月）3回行っており、常に100名を超える方が参加され、多い時には1開催で300名を超えることもあります。また、活動は冬のヨシ刈りだけに留まりません。春から夏にかけては、琵琶湖の固有魚を脅かすブラックバスやブルーギルを駆除する「外来魚駆除釣り大会」、8月の真夏には、うっそうと茂る成長期のヨシ原を湖面から観察する「カヌーに乗ってヨシ原観察会」を開催しており、会員の家族を巻き込み、楽しみながら環境意識を醸成する活動に発展させています。

2007年　社内有志によるヨシ刈り

2009年　ネットワークで
初めてのヨシ刈り

2017年　産学官民
数百名が集うヨシ刈りに成長

小学校での出前授業のようす

ネットワーク通信　30刊発行

## 広がるネットワーク活動

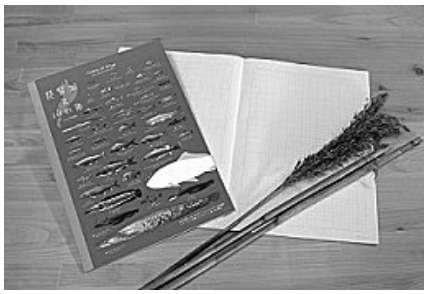
様々な異業種の事業体が集まるネットワークの会員。活動を通してゆるやかに繋がる仲間の親交を深めていくため、定期的に会報誌「ネットワーク通信」を発行しています。活動のようすや各分野の専門家の研究の話題、会員の自社PRのページを設けることで会員参加型の誌面を常に心掛けています。また、教育の現場では、ヨシ原の大切さを次世代へ伝え、継承していくことが重要との思いから、小中高大の学校を中心にした地域社会でのヨシの出前授業を10年前から継続しています。これまでに延べ3,000名を超える方々にヨシの大切さ、琵琶湖の素晴らしさを伝えて続けており、実際にヨシ刈り体験に来られる大学生も増え、若い力と熱意を感じる機会が増えています。

## ヨシからできたエコ文具「リエデン シリーズ」

時代に合ったヨシの活用を目指すエコ文具「リエデンシリーズ」は、当社が長年培ってきた紙製品加工技術を活かし、本業の生産活動の中で、事業として地に足を着け、収益も含めて継続できる活動を進めています。

しかし、ヨシの商品化には非常にコストが掛かります。プロジェクト立ち上げ当時、試行錯誤を繰り返し、ヨシパルプの配合率を商品の価値毎に変えることで商品化にこぎ着けることができました。コピー用紙のような価格重視の商品には1%配合、風合いを活かした30%配合品、こだわりの商品には100%のヨシパルプを配合しコストと品質の壁をクリアーすることができたのです。

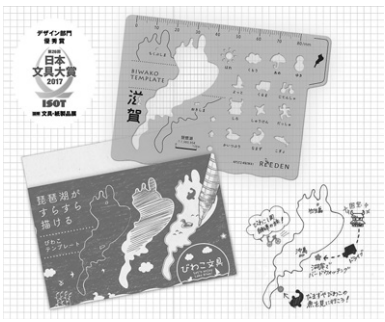
リエデンシリーズ



滋賀のお魚ヨシノート

ヨシ筆ペン

リエデン　びわこ文具




びわこテンプレート

リエデンシリーズは、単なる環境商品ではありません。自らが刈ったヨシを商品の原料に使うという自己完結型の循環利用を実現しており、実際にリエデン商品を使われるお客様から“自分達が刈り取ったヨシがこの商品の中に入っているので愛着を感じる”といった感想をいただける魅力ある商品になっているのです。更に近年では、その風合いを活かしてデザインや表現に工夫を凝らし、地域文化や伝統、キャラクターや催しと積極的にコラボすることで、「エコは当たり前」プラスαの付加価値を付けています。おかげさまで年代を問わず幅広い年齢層から支持を得る商品に進化しており、商品を通じて琵琶湖環境への関心を広げています。また、この売上げの一部を地元の地域活動に寄附することをはじめ、ボランティアで刈り取ったヨシを地元環境団体から直接買い上げることで、「地域によし」「商品によし」「環境によし」の三方よしの社会を創り出しており、新しいヨシ産業の先駆けとなっています。

## これまでの成果・評価

＜保全活動＞

これまでの長年の活動を通して多くの仲間と出会うことができ、活動の規模も益々拡大を続けています。同時に、保全効果も年々現れ今後の励みになっています。

1.「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」会員数:
現在125社が賛同。
2. ヨシ刈りボランティア実績:
33回開催、413社から3,840名が参加。
3. 刈り取りによるヨシ原保全面積:
約10万$m^2$（甲子園球場2.5コ分）
4. 水の浄化量:
窒素分209万トンの水・リン分577万トンの水
5. $CO_2$の固定による回収量:
143トン／$CO_2$

※バイオマス調査結果から独自算出

＜ヨシの活用＞

これまでの経験から単なるエコ商品だけでは顧客の心に響かない。ストーリーやメッセージ、プラスαの付加価値が必要であることを学びました。

1. ヨシの持続的活用量：計195トン
① 琵琶湖、淀川水系のヨシ問屋のヨシ活用:
145トン
② ボランティアで刈り取ったヨシ活用:
50トン
2. エコ文具「リエデンシリーズ」の商品点数：88品番
3. 地域活動団体等への寄附金額：210万円

外来魚駆除釣り大会のようす

カヌーでヨシ原観察会のようす

バイオマス調査のようす　「高さ」「密度」「重さ」「太さ」の測定

＜普及・啓発活動＞

活動は楽しくなければ続きません。家族や友人とコミュニケーションを図れる場所づくりが必要ではないでしょうか。

1. 外来魚駆除釣り大会:
   7回開催、83社から747名が参加（2011年から）
2. カヌーでヨシ原観察会:
   6回開催、35社から93名が参加（2014年から）
3. 学校・地域での環境学習会:
   70回実施、3,500名が参加
4. 広報誌「ヨシでびわ湖を守るネットワーク通信」:
   30刊発行

## 今後の取り組み

これまでの10年の取り組みで、事業として安定した基盤が整い、活動、商品共に認知が広がる中で、滋賀県と情報交換を行うまでになりました。新たな取り組みとして、これまでに研究データのなかった冬のヨシ原のバイオマス（生物資源量）調査を県立琵琶湖博物館と共同で開始しました。ヨシの密度、高さ、太さ、乾燥重量、炭素量などの最新の科学的データを蓄積し、冬のヨシの生産量を評価していきます。更に将来、このデータを元に滋賀県と琵琶湖独自の「ヨシのカーボン認証」を見据えており、関係者と準備を進めています。一方、ヨシ活用の取り組みは、紙製品だけに留まらず文具類での活用を広げていくため、他の素材へのヨシ利用を考えています。新たな異業種のパートナーと協働することで市場の拡大を図り、滋賀県から近畿圏へ、更には全国ネットで消費者から共感を得られる魅力にあふれた商品展開を目指します。

最後に、（株）コクヨ工業滋賀はこれからも、地域社会とのつながりを大切にし、商品と活動を通して共感の輪を広げて参ります。

株式会社コクヨ工業滋賀